

秋肥価格過去最大の値上げ幅

脱炭素社会に向けたメーカーの動き～世界景気 物価上昇で消費者心理は冷え込み懸念

全農は5月31日にホームページにて6月1日から10月31日までの秋肥価格について下記の通り発表した。年2回の肥料価格改定の中での価格の上げ幅は過去最大となった。これは、コロナ禍による物流の停滞や石油価格高騰から始まり昨年10月に日本におけるリン安の最大調達国であった中国による肥料検査強化による供給タイト、カナダに次ぐ塩化加里の輸出国であったロシアのウクライナ侵攻による経済制裁、船運賃の上昇と円安も重なったためだ。過去にリーマンショックや原油に代わるバイオエタノール原料に注目が集まった時には肥料価格は高騰したものの2年もすれば原料価格は下げに転じており一時の価格高騰であったが、今回の肥料価格高騰は複数の要因が一度に重なってしまったために単年度で元に戻るような装いにはならなさそうだ。肥料は秋肥よりも全国で水稻に使用する時期でもある春肥の方が需要は大きく、既に生産者の方からはその対策を真剣に検討し始めている声も聞こえてきている。

政府も本年6-10月分の秋肥において「原油価格・物価高騰等総合緊急支援事業」にて予備費を活用し秋肥の価格高騰対策として100.2億円を拠出したが、問題は多くの農家が利用する来春肥だ。5月13日にJA全中主催の「食料・農業・地域政策推進全国大会」にて自民党の元農水相である森山衆議院議員は、ロシアのウクライナ侵攻等で食料安全保障のリスクが顕在化する中、最重要課題として取り組んでいることを強調した。また、肥料高騰対策も言及し参院選後の補正予算の議論の中に、しっかり肥料対策を位置づけたいと発言し農家の負担を軽減する仕組みづくりを進める考えを示した。また、「20年前に肥料が上ったときも高騰分の7割を補填する仕組みをつくったが、農家の事務量が大変だったという反省があった。肥料の仕組みの対象は100万戸くらいに上るが、スピーディーにどう進めるかしっかりと考えたい」と述べ、来る来春肥は補正予算の中に肥料価格高騰対策を組み込む可能性がある事を示している。実際に今回予備費から拠出された事業費の受け取り対象は農家でなくメーカーが申請対象となり、その補助金は化学肥料原料を代替国等からの調達に要するコスト（輸送費・保管費）の上昇分の掛かり増し経費の一部を支援するものとなる。しかし、農家はこの秋肥価格を見聞きしてたまげる事だろう。また、追い打ちをかけるようにカナダ産塩化加里は大幅な値上げを受け入れ決着しており、資源のない我が国は厳しい現実を突きつけられている。あとは春肥の原料調達までに尿素やリン安の価格が値下げに転じるかどうかという情勢だが、期待している中国も6月以降に肥料検査体制が緩和されるという噂があるが本誌発刊時までは新たな動きがない。中国のゼロコロナ政策が供給網の混乱要因となっている中で、春肥は高止まりならまだましで塩化加里のように値上げ要請もあることからリーマンショック時のように大きく下げに転じるような情勢ではない装いだ。

一方でこのような情勢の中で米価が低迷のままに更に農家の財布のヒモはきつくなるばかりだ。世界景気の減速懸念が強い中で米国の利上げによる影響で円売りドル買いとなり円安傾向が継続すると輸入品は高値安定になるのは必至だ。肥料銘柄の中で最大の流通量を誇る汎用化成肥料であるオール14（窒素：リン酸：加里成分で14%-14%-14%）はこの1年で店頭価格が20kg袋当たり1,000円近く値上がりしている。既に農家は更なる値上げ懸念を懸念して倉庫と資金に余裕のある方は購入に動くという話を聞

分類	品目	成分(%)	前期比(春肥比)	
単肥	窒素質	尿素(輸入・大粒)	46	94%
		尿素(国産・細粒)	46	73%
		硫酸(粉)	21	45%
	りん酸質	過石	17	25%
		重焼りん	35	25%
	加里質	塩化加里	60	80%
けい酸加里		20	36%	
複合肥料	高度化成(基準)	15-15-15	55%	

(次ページへ続く)

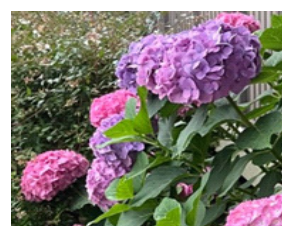
出典：全農ホームページより

(前ページより続く)

く。また、次の春肥は使い慣れた肥料を来春も供給してもらえるのだろうかという相談も続々と寄せられている。更には化成肥料の使用量を減らして鶏糞をどれ位使用したら収量が落ちずに済むかといった相談もあり鶏糞が供給タイトになりつつあるとの声も聞かれてきている。また、カーボン排出量の低減を目指す国産硫酸のトップシェアを誇るカプロラクタムの副生成物で回収・製造している硫酸メーカーのUBE株式会社が5月19日に発表した中期経営計画で、2024年度を目途に主要期系の停止により減産する方向で検討を深めるという発表がなされた。硫酸は他に製鉄所のコークス炉ガス中のアンモニアを硫酸液で回収する副産硫酸もあるが、製鉄所の高炉休廃止により国産の硫酸供給はタイト感が出て来る事となるだろう。国外の原料調達が厳しい状況の中でも国産原料製造が環境問題や採算低下、肥料工場の老朽化による再投資断念により閉鎖や撤退がこれからも出て来るかも知れない。脱炭素化社会の到来は肥料業界にとっても大きな転換期を迎える。

紫陽花のお話

梅雨の季節にきれいな花を咲かせるのが紫陽花です。紫陽花はピンクと青が一般的ですが、花の色は実は土壌の「pH」が関係しています。この読み方については以前より議論されていますが、以前日本には化学の情報がドイツから多く入ってきたという経緯がありドイツ語で「ペーハー」と呼ばれていたためこの呼び方が一般的でした。しかし世界の主流は「ピーエッチ」。1957年にはJIS規格で定められたものの、「ペーハー」が使われ続けました。現在学校では全て「ピーエッチ」で統一されているようです。



紫陽花の色は土壌に含まれるアルミニウムと花が持つアントシアニンの化学反応で変わります。一般的にアジサイ（紫陽花）の花色は、酸性土壌で青色に変わり、アルカリ性土壌でピンク色に変わると言われています。紫陽花だけではなく農作物の生育も、pHが重要です。多くの作物の生育には弱酸性のpH 6.0～6.5が良いとされていますが、ほうれん草・たまねぎ・キャベツ等で6.5～7.0の中性域、ニンジン・トマト・ナス等では6.0～6.5の弱酸性域の土壌でよく育ちます。土壌が酸性域に傾いてしまうと、窒素・リン酸・カリウムなどの養分が吸収しにくくなり、マンガン・鉄・銅などの微量元素の過剰症を生じやすくなります。しかし、日本の土壌の多くは酸性が強いうえに、温暖で雨が多い気象条件のため酸性になりやすいです。雨水には炭酸が入っているため、雨が土壌に直接落ちると、土に含まれるカルシウム、マグネシウム、カリウムが追い出され、炭酸が吸着してしまうため酸性化が促されます。土壌が酸性になると、作物はホウ素やモリブデンの欠乏症が発生しやすくなります。また、アルカリ性に傾くと、マンガン・鉄・銅などの微量元素が吸収されにくく欠乏症を生じます。さらにマンガン、鉄、銅、亜鉛は酸性で溶けやすいため、過剰に吸収されて障害が発生しやすくなります。そこで、アルカリ性の石灰質肥料を散布し、それぞれpHで土壌の状態を確認して適切な資材を施用して作物の好むpHに調整していく必要があります。私たちの体もpHが中性になることが良いとされています。健康な人の動脈血はpH7.35～7.45くらいで中性に近い値をとります。医療の世界ではこの範囲よりも酸性に近づく病態をアシドーシス、塩基性に近づく病態をアルカローシスと言います。人間の体の中では、栄養素の代謝に伴い、1日あたり20,000mEqの酸がつくられますが、余分な酸は、腎臓の働きで尿として体の外に排泄し、肺から二酸化炭素として排出しています。残った酸は、腎臓で調節される重炭酸イオンによって吸収され、炭酸になることでアルカリ性に働き、体内の酸度を下げます。腎臓が正常に働かず、体が酸性に傾くと免疫力が低下して、様々な病気を引き起こす可能性があります。また、疲労感や脱力感などといった症状もあるといわれています。逆にアルカリ性に傾くとけいれん・吐き気・しびれなどの体調不良が現れるといわれています。どちらか一方に偏りがあるのではなく中性でなければ維持できないようになっていきます。人体も農作物もpHが重要ですが、夏に向けて、機会があればご自身の身体を見直してみたいはいかがでしょうか。(東京支店)

関東甲信越が梅雨入りしました。近年、大雨による水害被害も発生することがしばしばありますので、お住まいやお勤め先のハザードマップ等を今一度ご確認ください。 編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>